

# NEW CROWN 授業実践事例

BOOK 2 LESSON 4 授業例①

Y.H. 先生

## 指導計画表

(全 12 時間)

時間	学習内容・主な活動
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ とびら</li> <li>・ オーラルイントロダクション</li> <li>■ GET Part 1</li> <li>・ 文法の導入</li> <li>・ 語句・表現の導入</li> <li>・ 本文の導入・理解</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ GET Part 1</li> <li>・ Practice</li> <li>■ 自己表現活動</li> <li>・ 語彙の意味・例文調べ</li> <li>・ テーマに関わる英作文</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ パターンプラクティス</li> <li>・ 目標文法の口頭練習</li> <li>・ 目標文法のライティング練習</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ GET Part 2</li> <li>・ 文法の導入</li> <li>・ 語句・表現の導入</li> <li>・ 本文の導入・理解</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ GET Part 2</li> <li>・ Practice</li> <li>■ 自己表現活動</li> <li>・ 語彙の意味・例文調べ</li> <li>・ テーマに関わる英作文</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ パターンプラクティス</li> <li>・ 目標文法の口頭練習</li> <li>・ 目標文法のライティング練習</li> </ul>
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ READ</li> <li>・ オーラルイントロダクション</li> <li>・ 音読</li> <li>・ 語句・表現の確認</li> <li>・ 題材内容の確認</li> </ul>

時間	学習内容・主な活動
8	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ READ</li> <li>・ 本文の復習（音読）</li> <li>・ 目標文法や語彙の意味・例文調べ</li> <li>■ 自己表現活動</li> <li>・ テーマに関わる英作文</li> </ul>
9	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 表現活動</li> <li>・ テーマに関わる英作文のまとめ・編集（個人）</li> </ul>
10	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 表現活動</li> <li>・ テーマに関わる英作文のまとめ・編集（グループ）</li> </ul>
11	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 表現活動</li> <li>・ プレゼンテーションの練習</li> </ul>
12	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 表現活動</li> <li>・ 地域の特産物についてのプレゼンテーション</li> </ul>

## 実践例

### 1. 生徒の姿と動機づけ

平成23年度の小学校外国語活動の本格的な実施から4年が経った。小学校にて外国語活動の授業を参観すると、児童はJTE（もしくはALT）が英語で展開する授業を楽しんでおり、大きな声で発声したり、伝えたい内容を英語で発信したりすることができている。しかし、そんな児童が中学校に入學し、夏休みを終えて2学期を迎える頃から授業中の様子に変化が見られるようになることが多い。教科書本文を最後まで読まずに座る、ペアでの活動を行わない、表現活動でどう発話すればいいのか考えていないなどの姿が見られ始める。「学んだことを生かして考えてみよう。やればできるよ。」などと励ましてみたところで、その後生徒の理解が深まったり、意欲的に取り組めるようになったりする様子はない。多くの教室で見られる生徒の姿ではないだろうか。

現行の学習指導要領外国語の目標として、言語や文化に対する理解を深めること、積極的にコミュニケーションを図る態度の育成を図ること、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養うことが掲げられている。日頃の授業においては、生徒が英文を読んだり、聞いたりして学んだことを基に、伝えたいことを書いたり、話したりするような構成になるよう心掛けている。その展開の中で生徒が意欲的に活動に取り組むことができるように仕向けていくには何が必要なのだろうか。村野井（2006）では、外国語学習が成功するかどうかを左右する最も大きな要因の1つとして動機づけを挙げている。そこでNEW CROWN Book 2 “LESSON 4 Enjoy Sushi”においてコミュニケーション能力の育成を目指した授業に動機づけを高める手立てをどのように取り入れていったらよいのかを深めることとした。

### 2. 動機づけの手立てを取り入れた実践展開

LESSON 4の授業は、村野井（2006）が述べる教科書重視の内容中心授業を中心に展開することと

した。その授業展開の主な指導の流れは、オーラルイントロダクションを行う（提示）、リスニングやリーディングを通して題材内容を深めさせる（理解）、文型練習や音読をすることで言語産出能力を高めさせる（練習）、題材内容を自分の英語で再生・要約したり、題材内容についての考えを表現したりさせる（産出）である。LESSON 4の題材内容について理解を深めさせ、関連するテーマについて産出させるような流れとした。動機づけの手立てを取り入れるに当たってはDörnyei（2001）を参考とした。図1は学習者の動機づけを創造し、高め、維持・継続させていく指導実践の流れを示したものである。本実践ではDörnyei（2001）が示している動機づけの具体的な手立てを、日本における中学校レベルで取り組めるように工夫を加えた。（資料1を参照）

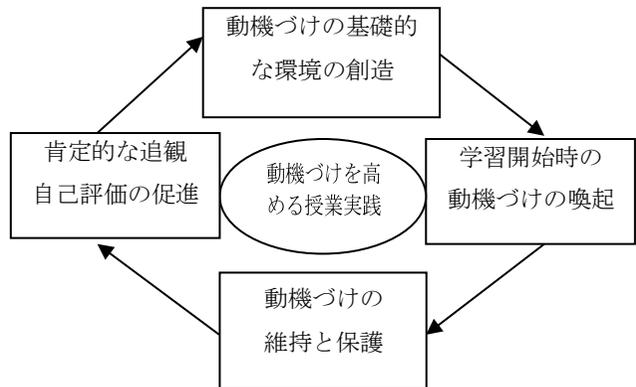


図1 動機づけを高める指導実践（Dörnyei, 2001）

### 3. LESSON 4 指導の具体例

本課では、there is / areを使った存在を現す表現や動詞enjoyに動名詞を加えたSVOの第3文型が新出文法として扱われている。それらが使用されている英文を通して、日本の食文化について知識を深めるとともに、自分の地域の食文化に目を向けることのできる単元である。図1が示す段階に沿って授業実践の内容を述べる。

#### ①動機づけの基礎的な環境の創造

実践前：筆者の勤める地域の食文化である寿司を交流のある大学生に伝える英文文を作成し撮影をす

ること、個人で作成した英文を持ち寄ってグループで完成させることを伝えた。グループ活動の際には私語が多く、活動に上手く参加できないことがあったため、まず始めにグループ活動を行う際の注意点を考えさせた。次時に生徒が書いた内容を知らせ、守っていこうと促すことで活動に意欲的に取り組むように意識させた。

## ②学習開始時の動機づけの喚起

第1時：LESSON 4の内容を深め生徒が行う発表のモデルを示すため、筆者が作成した地域の特産物を紹介するモデルとしてプロジェクターを通して英文を提示し、口頭発表をした。LESSON 4で扱った新出文法は音声先行で導入し、意味や文構造が理解できるように字体や色を目立たせた。

第2時：GET Part 1の本文内容を理解するとともに、新出文法である there is / are の例文を辞書で調べ、地域の寿司を紹介する英文を作成させた。表現したい英文を辞書で調べた例文を基に作成するなど、取り組みを通して作り上げていく活動を重ねた。

第3時：there is / are の文法を読んだり、書いたりさせながら反復練習をさせた。課題の達成目標を提示し、ポイントやアドバイスを一人ひとりに与えた。課題を達成した生徒をモデルとして示し、模範として具体的に示した。また生徒同士によるフィードバックの機会を多く設定した。

第4～6時：GET Part 2もGET Part 1と同様のパターンでSVOの文法事項の提示、英文の作成、反復練習をした。同じ流れで行うことを示すことにより、2回目には活動に慣れて取り組める展開にした。

第7時：Readには3地域の寿司が取り上げられ、紹介する英文が書かれている。本時は内容理解に焦点を当て、内容を問う英語の質問に答えさせることで理解度を確認した。各地域の寿司に関して日本語による背景知識を与え理解をより促すとともに、自分たちの地域の特産物の特徴についても考えさせた。

第8時：Readにおいて扱われている文法や語彙の中で英文を作成する際に必ず取り入れて欲しい文法や語句を示し、それらについて辞書を使用し

て例文を調べさせた。また地域の特産物である寿司を紹介する英文の作成には、調べた例文の語句を置き換えて取り入れるように指示し作成させた。

## ③動機づけの維持と保護

第9～11時：生徒にはこれまでに作成してきた英文や教科書の英文を活用して地域の特産物である寿司を紹介する英文を完成させることを指示した。英文の正確さよりもテーマに対して自分の考えを多く表現できているかに着目させ英文を作成させた。まずは個人で作成させ、次に作成した英文を持ち寄って各自の良い表現を取り入れながらグループで完成させることとした。グループで作成した英文の内容や正確さをチェックした後、プレゼンテーションする担当箇所を決めさせ、流暢に発言できるように繰り返し練習させた。発音やスピード、アイコンタクトなど発話する際に注意する点を指導し、実際に撮影しながら繰り返し練習に取り組ませた。

第12時：繰り返し練習をした地域の寿司を紹介するプレゼンテーションに取り組ませた。練習の過程で間違いのあった箇所や注意すべき発音などを確認し、正しく発話するように意識させた。以下に生徒がグループで作成しプレゼンテーションを行った英文の一例を記載する。

【生徒が作成したプレゼンテーション英文】

○○ Sushi

There are many delicious food in △△. △△ is famous for its ××. △△ is also famous for its sushi. We would like to introduce about ○○ sushi today.

The sea around △△ is very beautiful. The fish are very fresh. There are many kinds of fish. So you can eat delicious sushi in △△. The sea around △△ is very beautiful. The fish are very fresh. There are many kinds of fish. So you can eat delicious sushi in △△. There are many sushi restaurants in △△. Sushi is expensive a little but it is worth eating. We hope you are interested in ○○ sushi. Please come to △△ and enjoy eating it. Thank you.

## ④肯定的な追観自己評価の促進

実践後：LESSON 4 のまとめとして生徒には取り組みのふり返りをさせた。その際には頑張った点やもう少し頑張れた点、学習が足りなかった点などについてふり返りをさせることとした。また、実践前、後に書かせた英文の内容から新たにできるようになった点についてもふり返りをさせた。取り組み過程で生徒が努力していた点やこれから気をつけるべき点をフィードバックし、これからも継続して努力して欲しいことを伝え単元を終えた。

## 4. 実践授業を振り返って

実践後にとったアンケートからは、「ビデオの前で英語を話すのは緊張したが、楽しかった」のような意見が見られた。授業内の活動の一つひとつ考えながら取り組み、グループで英文を仕上げた達成感を感じることができたのだろう。生徒が活動の中で「できる喜び」を感じたり、グループの中で認められたりする仕組み作りが動機づけを高めることになると実感した。統計分析を行った結果、授業の活動に前向きに取り組むことができた生徒の多くは動機づけが高まっていた。

その一方で、授業後に動機づけに対する変化が見られなかったり、低まったりする様子も見られた。これらの生徒は、授業中の活動や教科に対して苦手意識があることがアンケートからわかった。そんな生徒達も、海外の映画や音楽などに対しては興味を示していた。生徒の興味・関心をつかみながら、生徒の心をつかむ教材を提示することも必要である。

本実践の中に取り入れた動機づけの手立ては、特別に変わったものではない。先生方が日頃取り組んでいることばかりである。それらを適切なタイミングで、意図的に取り入れながら、系統観を持って指導し続けていくことが生徒の動機づけを高めていくことに繋がると考えている。

本実践では動機づけに効果があると捉えた手立てを意図的に取り入れた。しかし、生徒にいきなり多くを求めすぎたことで負担を感じている生徒も見受けられた。どの手立てをどのように取り入れていくかを考え、適切なステップを提示していくことが今後の課題である。教師の言葉かけや支援は多くの

生徒の「やってみよう」する気持ちを引き出すことを生徒の姿を通して改めて認識した。太田（2012）に効果を感じる 10 項目の動機付けが載っている。それらの中で、授業の中で実践できるものから少しずつ取り入れていくことが生徒の動機づけを高める最初の一步となるだろう。

生徒の動機づけは教師との信頼関係の上に生徒の力を伸ばし、自信をつけさせていくことが鍵となると実践に取り組みながら感じた。目を輝かせ意欲的に授業に臨む生徒を育成するべく、これからも指導を続けていきたい。

## 【参考文献】

- 太田洋（2012）「英語の授業が変わる 50 のポイント」光村図書
- 村野井仁（2006）「第二言語習得研究から見た効果的な指導法・学習法」大修館書店
- Dörnyei, Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge, UK: Cambridge University Press. [米山朝二・関昭典（訳）（2005）『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店]